

Experience of distributed Hybrid Class in elderly nursing assistance: On-campus exercises and online presentations

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀之内, 若名, 内野, 良子, HORINOUCI, Wakana, UCHINO, Ryoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000097

【資料】

高齢者看護学援助論における分散型ハイブリッド授業の経験 ～学内演習とオンライン発表会を行って～

Experience of distributed Hybrid Class in elderly nursing assistance:
On-campus exercises and online presentations

堀之内 若名 内野 良子
Wakana HORINOUCI Ryoko UCHINO

要 旨

看護学科2年次後期の必修科目「高齢者看護学援助論」(2単位, 30回開講)の授業は, 新型コロナウイルス感染症(Corona-Virus Disease-2019: 以下COVID19)の拡大をうけ, ハイブリッド授業を設計した。終講試験の受験資格は, 学内演習に出席しなくてもオンライン授業にすべて参加することを条件とした。結果は, すべての授業で9割以上の学生の参加が得られた。看護過程やアクティビティケアのオンライン発表会(同時双方向型授業)では, 出席したすべての学生は, 事前課題提出から当日のプレゼンテーションまで, 主体的に参加したと考える。対面授業である演習については, 十分な感染対策を配慮し実施した。対面授業も同様に, 事前学習から当日の取り組み, 事後レポートの提出まで非常に主体的であったと考える。今後, COVID19の影響は続くと考えられるが, 授業内容や実施方法を十分に検討し, 学生の学びを支援したい。ハイブリッド型授業の内容について報告した。

キーワード: 新型コロナウイルス感染症, ハイブリッド授業, 学内演習, オンライン発表会

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症(Corona-Virus Disease-2019: 以下COVID19)の拡大は教育現場にも多大な影響を及ぼした。本学においても2020年度前期は, 原則学生の入構が禁止となり, オンライン授業が開始された。オンライン授業の導入についてはシステム構築が必要となりソフトウェア使用方法等について教員, 事務局職員の協力が必要であった。文部科学省からは, 「地域の感染状況や, 教室の規模・受講者数・教育効果等を総合考慮し, 今年度の授業の実施状況や学生の状況・希望等も踏まえつつ, 感染対策を講じた上での面接授業の実施が適切と判断されるものについては面接授業の実施を検討と遠隔授業を実施する場合にも, 面接授業との併用を検討。」¹⁾ 旨の通達が出され, このため本学も後期からは, 演習・実習に限り学生の入構が許可されることとなった。本報告は, 看護学科2年次後期の

必修科目である「高齢者看護学援助論」, 授業回数は30回である。授業は学生が高齢者看護に必要な知識と技術を学修できるような内容となっている。

これまですべての授業を対面で行ってきたが, 今回の事態を受け, オンデマンド授業・オンライン発表会と対面授業(演習)を併用したハイブリッド型授業から得られた経験を報告する。ハイブリッド型授業とは, 対面授業とオンライン授業の組み合わせのうち, 1つのコース(例えば15回の授業からなる)の中で対面授業とオンライン授業を組み合わせることで実施することである²⁾。

2. 「高齢者看護学援助論」の概要

対象学生は幕張ヒューマンケア学部看護学科2年次生150名, 3年次生内容6名, 合計156名であった。授業内容は「高齢者の健康維持および介護予防における支援ができるように, 高齢者の生活史, 家族背景などから多面的に理解し, 多職種との協働における看護の役割を考察するものとしている。さらに, 加齢にと

もなう変化と複数の疾患を併せ持つ高齢者に対する看護を展開できるように、高齢者に多い疾患とその看護、治療における特徴を理解する。特に、認知症高齢者については全人的に捉える視点を養い、対象の健康と尊厳ある生活を支援できるように、疾患の特徴と看護を理解する。」としている。到達目標は、「1. 加齢変化が生活機能に及ぼす影響を説明できる。2. 高齢者によくみられる症状・障害の特徴を説明できる。3. 高齢者に対する日常生活援助技術を実践できる。4. 高齢者に多い疾患や障害の特徴について説明できる。5. 高齢者の健康段階に応じた治療及び看護援助について説明できる。6. 高齢者の特性をふまえた看護過程を展開できる。」とした。高齢者によくみられる疾患や症状に対する看護、さまざまな健康レベルにある高齢者を対象としたアクティビティケア、事例を用いた看護過程展開という内容を含んでいる。

後期からは演習、実習については学生の入構が許可されることとなり、どのように授業を組み立てることが効果的か担当教員で吟味した。すべての内容をオンラインで実践することは限界がある、学生が構内で学びたいという要望がある等を推察し、最終的にオンデマンド授業・オンライン発表会、対面授業（演習）を実施することとした。これは、COVID19の拡大がある程度コントロールされている状況での想定であり、感染拡大や対象学生に感染者が出た際には、速やかにオンラインに切り替えができるような配慮も行った。

3. 倫理的配慮

学内で演習を行うにあたり、学生に対し配慮したことは以下の通りである。

1) 感染予防

感染リスクを下げるための効果的な手段に、飛沫感染対策としてのマスクの着用や、接触感染対策としての手指衛生（適切な手洗いや手指消毒用アルコールによる手指消毒）がある。また、三密（密集・密接・密閉）を避けることも感染リスクを下げる手段であり、これらの手段を最大限に執ることで、可能な限り感染リスクを軽減することが重要である³⁾とされることから、教室及び実習室入室時に健康チェックシートの確認を行い、体調がすぐれない者、シートの提示ができない学生は演習への参加を認めないこととした。さらに、教室・実習室に手指消毒剤の設置、換気の実施、可能

な限り学生間の距離を保つ、などの配慮を行った。学生は常にマスクを装着できており、状況に応じてフェイスシールド着用を促した。

2) 移動時間の確保

本科目は金曜の1、2限であるが、3限には他の必修科目があった。授業を11時30分には終了し、移動時間の確保をした。3限の必修科目の担当教員には、移動のため遅刻する学生が出る可能性についてお伝えし、了解を頂いた。

3) 出席回数の確保

健康状態や家庭の事情等により演習への参加が難しい学生がいることも考慮した。学内演習は30回の開講回数のうち8回とし、学内演習に参加できなくとも、オンデマンド授業に参加することで、終講試験の受験資格を得ることができる範囲と設定した。

4) 投稿に関する説明と同意

今回の授業内容等を本学紀要に投稿するにあたり、対象学生にはポータルサイトを通じて周知した。「論文内容は本科目の授業の方法や内容であり、学生の個人情報が出ることは一切ない。掲載へ質問の質問や意見を受け付ける」ことを一定期間掲載し、掲載への反対意見がないことを受け同意を得たものとした。

4. 実際の授業展開

講義は専任教員2名、非常勤講師1名、計3名の教員が担当した。演習は専任教員2名と非常勤助手2～3名で担当した。授業進度は、COVID19の影響が出る前に計画していた順序を保てるように配慮した。出席確認の方法については、前期の高齢者看護学概論の授業では出席確認に1週間の期間を設けていてもほとんどの学生は授業の当日に回答していること、前回授業の出席確認が整理できる前に次の授業となるため出欠状況を正確に把握しにくいという状況があったことをふまえ、後期の授業は出席確認の回答（Forms¹⁾にて1～2問）期限を授業当日とした。ネットワーク環境の不安定な学生がいることも考慮し、当日のうちに授業視聴や回答ができない場合は、何らかの形で教員に連絡するように周知した。

対面授業の日程と学生配置を表1、シラバスを表2で紹介する。できるだけ登校による他者との接触を減

表1 高齢者看護学援助論 対面授業(演習)

2020/10/ 2 (金) 1・2限	77名 (39名と38名に分散)
2020/10/ 9 (金) 1・2限	79名 (40名と39名に分散)
2020/10/30 (金) 1・2限	79名 (40名と39名に分散)
2020/11/ 6 (金) 1・2限	77名 (39名と38名に分散)
2020/11/13 (金) 1・2限	77名 (39名と38名に分散)
2020/11/20 (金) 1・2限	79名 (40名と39名に分散)
2020/12/ 4 (金) 1・2限	79名 (40名と39名に分散)
2020/12/11 (金) 1・2限	77名 (39名と38名に分散)

表2 高齢者看護学援助論 covid19を配慮した修正版シラバス

日・回数	1～5G	6～10G	11G～15G	16G～20G
	学習内容			
1	ガイダンス 講義1			
2	講義2			
3	講義3	高齢者疑似体験		高齢者とのコミュニケーション
4	講義4	高齢者とのコミュニケーション		高齢者疑似体験
5	高齢者疑似体験	高齢者とのコミュニケーション		講義3
6	高齢者とのコミュニケーション	高齢者疑似体験		講義4
7～10	講義5～8			
11	高齢者の食生活を支えるケア 口腔内・義歯のケア	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開② アセスメント	講義9	
12	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開② アセスメント	高齢者の食生活を支えるケア 口腔内・義歯のケア	講義10	
13	講義9		高齢者の食生活を支えるケア 口腔内・義歯のケア	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開②
14	講義10		高齢者の事例を活用した 看護過程の展開②	高齢者の食生活を支えるケア 口腔内・義歯のケア
15	講義11		高齢者の事例を活用した 看護過程の展開③ 関連図	高齢者の排泄を支えるケア おむつ交換
16	講義12		高齢者の排泄を支えるケア おむつ交換	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開③ 関連図
17	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開③ 関連図	高齢者の排泄を支えるケア おむつ交換		講義11
18	高齢者の排泄を支えるケア おむつ交換	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開③ 関連図		講義12
19～20	講義13～14			
21	高齢者の活動を支えるケア 移動・歩行	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開④ 看護問題の抽出	講義15	
22	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開④ 看護問題の抽出	高齢者の活動を支える ケア移動・歩行		講義16
23	講義15		高齢者の活動を支える ケア移動・歩行	高齢者の事例を活用した 看護過程の展開④ 看護問題の抽出
24	講義16		高齢者の事例を活用した 看護過程の展開④ 看護問題の抽出	高齢者の活動を支える ケア移動・歩行
25～28	看護過程の展開 演習			
29～30	アクティビティケア 演習			

らしたいという思いもあり、学生は8コマの演習のために入構するが、1日に2コマの演習に参加するため、登校は4日とした。受講生156名を20Gに分け、一演習は5G、38～40名で構成した。実際の展開方法は表のとおりである。

5. 結果

オンデマンド授業は常に9割以上の出席率であった。しかし、ビデオの視聴回数と出席者数が合わないことが多く、一部の学生はビデオ視聴することなく配布資料だけを見て出席確認テストに回答していたことが考えられた。どの学生がビデオを視聴したのかは確認できないため、出席確認テストに回答していたものは出席とした。学内演習は4日間8コマであったが、

こちらの出席率も常に9割以上であった。内容は高齢者疑似体験と身体を使った高齢者とのコミュニケーション、高齢者の食生活を支えるケアとして摂食嚥下・口腔ケア、高齢者の排泄を支えるケアとしてリハビリパンツを用いたおむつ交換、高齢者の活動を支えるケアとして移動・歩行のケア、であった。学生は事前課題を行って演習に参加しており、事後課題も提出することができていた。看護過程の展開は2事例のうち1事例の展開を行った。入構時には同じ事例を展開する学生同士でグループワークを行い、意見交換を促し、教員もサポートに入った。また第28回には看護過程オンライン発表会、第30回にはアクティビティケアオンライン発表会を行った。表3は看護過程オンライン発表会のプログラム、表4はアクティビティケアオンライン発表会のプログラムである。発表会に

表3 高齢者の事例を活用した看護過程の展開 発表会プログラム

時間	内容
9:00	第1クール (1G, 2G, 3G, 4G, 5G) オリエンテーション
9:05	発表 (4分/人)
9:37	質疑応答
9:45	終了
9:50	第2クール (6G, 7G, 8G, 9G, 10G) オリエンテーション
9:55	発表 (4分/人)
10:27	質疑応答
10:35	終了
10:40	第3クール (11G, 12G, 13G, 14G, 15G) オリエンテーション
10:45	発表 (4分/人)
11:17	質疑応答
11:25	終了
11:30	第4クール (16G, 17G, 18G, 19G, 20G) オリエンテーション
11:35	発表 (4分/人)
12:07	質疑応答
12:15	終了

【発表について】

- ・発表時間は、交代時間を含め1人につき4分とする
- ・資料の丸読みではなく、口頭で補足しながら発表する
- ・自分の担当事例でないほうの質疑応答にも参加できるよう準備して参加する
- ・司会進行は教員が行う

【作成資料について】

- ・A3用紙に患者の全体像、問題リスト、今回発表する問題を抽出するまでのアセスメント、看護計画(1つか2つ)を記載
- ・作成した資料は、前日までに自分のチャンネルのファイルにアップしておく

表4 アクティビティケア 発表会プログラム

時間	内容
9:00	第1クール (1G, 2G, 3G, 4G, 5G) オリエンテーション
9:05	発表 (4分/人)
9:37	質疑応答
9:45	終了
9:50	第2クール (6G, 7G, 8G, 9G, 10G) オリエンテーション
9:55	発表 (4分/人)
10:27	質疑応答
10:35	終了
10:40	第3クール (11G, 12G, 13G, 14G, 15G) オリエンテーション
10:45	発表 (4分/人)
11:17	質疑応答
11:25	終了
11:30	第4クール (16G, 17G, 18G, 19G, 20G) オリエンテーション
11:35	発表 (4分/人)
12:07	質疑応答
12:15	終了

【発表について】

- ・発表時間は、交代時間を含め1人につき4分とする
- ・資料の丸読みではなく、口頭で補足しながら発表する
- ・自分の担当事例でないほうの質疑応答にも参加できるよう準備して参加する
- ・司会進行は教員が行う

【作成資料について】

- ・A3用紙に患者の全体像、問題リスト、今回発表する問題を抽出するまでのアセスメント、看護計画(1つか2つ)を記載
- ・作成した資料は、前日までに自分のチャンネルのファイルにアップしておく

あたり、学生は事前に作成した資料をPDFに変換し Teamsⁱⁱⁱ⁾の自分の所属するチャンネルにアップした。数名の学生を除き指示通りに資料提出を行っていた。教員は発表順にPDF整理を行い、スムーズな発表に備え当日は教員が画面共有ならびに司会を行った。学生は遅刻する者もなく時間できちんと参加し、プレゼンテーションを行うことができた。この点は、事前に教員が予想していた以上の提出資料やプレゼンテーションであり、通常の授業では見るのが難しい、学生が持つ力を見せてもらったと感じている。学内のネットワーク環境の影響か、画像・音声がつながりにくいことが1回線1回だけあったが、教員が分散して実施することと非常勤教員の協力により無事に終えることができた。初回から数名の学生が欠席を続け終講試験の受講資格を失効しているが、それ以外の学生は全員が終講試験を受けることができた。

6. 考察

毎回のオンライン授業にすべて参加していれば、学内演習に出席しなくても終講試験の受験資格を得ることができるように授業設計を行っている。感染対策を講じてはいるものの、コロナ禍の状況においてどの程度の学生が学内演習に出席してくるのかは見通せない部分があった。しかし、結果的には毎回の学内演習にはほとんどの学生が出席した。

2020年度後期2年次生の授業では、入構での授業を行ったのは本科目のみであり、学生には入構して直接学友と共に学びたいというニーズがあったことが考えられた。感染リスクもあるなか実施に踏み切ったのは、オンライン授業だけでは学べない「実践」につながる知識と技術の修得を考えたこと、また入構して学友とともに学びたいという学生のニーズ1)を考慮したことにある。学生は演習の事前学習、事後レポートもきちんと提出しており、演習自体にも積極的に参加しているように見えた。学生同士で談笑する様子や、学生間の距離が近づかざるを得ずはらはらとする場面もあったが、感染予防対策を遵守しながら実施することで無事に終えることができたと考えられる。

COVID19による必要性がなければ、今回のような遠隔授業を積極的に導入することは考えることはなかった。今回の感染拡大は私たち高齢者看護領域の教員にとっても、学生への教育方法や内容について何をどのように取捨選択すべきなのかを考える良い機会と

なった。オンデマンド授業は繰り返し視聴でき復習も行えるというメリットがあるが、教員には学生の反応を見る機会がないため、なかなか評価が難しいと感じている。オンラインでの授業は今後も継続する。科目ごとにどのような授業形態が望ましいのか熟考することが必要である。学生のリアクションペーパーや授業アンケートを活用し、オンデマンド授業においても、対面授業においても、これまで以上の学びをえることができるよう今後も工夫を続けることが必要だと考える。

謝辞

市中感染が広がるなか、本学でもいつ感染者が出て不思議ではない状況であった。学内演習を最後まで行うことができたのは、学生が自分自身で自己管理できていたことが最大の理由であり、学生に感謝する。また、実習指導と併せて授業参加のためPC操作習熟に努力された非常勤助手の先生方にも併せて感謝する。

註

- i) Microsoft 365アプリケーションの1つであるアンケート作成ツール
- ii) Microsoft 365アプリケーションの1つであるコミュニケーションツール

引用文献

- 1) 文部科学省：本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について、令和2年7月27日付事務連絡
- 2) 田口真奈：授業のハイブリッド化とは何か―概念整理とポストコロナにおける課題の検討、京都大学高等教育研究26, 65-742, 2020.
- 3) 国立感染症研究所：<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2484-idsc/9582-2019-ncov-02-qa.html>, 令和3年2月13日閲覧

受付日：2021年2月15日 受諾日：2021年5月6日

